



『モルゲン、明日』 坂田雅子監督作品 上映会とミニ講座

2019年2月10日(日) 会場：大磯町立図書館大会議室

午前の部 10時～12時 午後の部 2時～4時

料金：500円 エネシフト会員は無料 各回定員60名 予約をお願いします

託児：午前のみ有り(3日前までに要予約) 連絡先：080-3217-0817(岡部Cメール可)

福島第一原発の事故から3ヶ月後の2011年6月、ドイツ政府は2022年までにすべての原発を廃炉にする決定を下しました。一方、当事国の日本では事故収束の糸口も見えないまま再稼働が始まり、原発輸出の話さえ出しています。

脱原発が日本ではなぜ広がらないのか？ ドイツではなぜ広がったのか？ 両国の違いは、いったいどこからくるのだろうか？

一答えを求めてドイツに向かった坂田監督は、さまざまな立場の人たちと会い、対話を重ねました。この映画には、その記録と報告だけでなく、過去に学び未来を拓きつつあるドイツ市民のエネルギー革命に至る歴史や背景にまで踏み込んだ、深い考察が盛り込まれています。そこには、日本でエネルギー革命を実現するための大きなヒントがあるように思います。「ドイツ、すごいなあ」「うらやましい」とため息をついている時期はもう過ぎました。次は、日本の私たち自身が何ができるか考え、行動を始める番です。

今回は、上映後に大磯エネシフト理事によるミニ講座を設けます。テーマは「教育」と「市民運動とメディア」。私たちに身近な二つの視点から、日本での脱原発・再生可能エネルギーへの動きについて考えたいと思います。(山村)



ミニ講座1

山村ゆみ子 ドイツ文学翻訳家

G・パウゼヴァング著の小説『みえない雲』を私が翻訳したのは、四半世紀以上前になります。1986年のチェルノブイリ原発事故直後に書かれたこの本は、児童文学大賞を受賞。ドイツではその後も世代を越えて読み継がれて100万部以上のベストセラーとなりました。学校では教材として使われ、家庭では親が子どもたちに伝え、現在もなお広く読まれています。ドイツの脱原発の動きは一朝一夕に実現したわけではありません。このような本が教育の場で使われ、原発を身近な問題として考える材料として使われていたことが、世論形成に大きく関わったと考えられます。

この映画には、90歳の作家パウゼヴァングも登場しています。ただ、今回は『みえない雲』に直接言及するのではなく、ナチス支配の時代に教育を受けた世代の一人として発言しています。「大統領の命令に従うことは非常に楽でした。自分で問題を解決しなくていいのですから」。しかし、その教育の代償は大きいものでした。ヒトラーが亡くなって涙を流した少女は、戦後、時間をかけて、政治に関与しない教育が間違いであることに気づきました。「自分の頭で物事を考え、行動することは社会に対する責任」——その言葉は重く響きます。

ミニ講座2

石川 旺 上智大学名誉教授 専門はメディア論

社会の変革が必要な状況が存在する時、学生という階層は歴史的に大きな役割を担ってきました。あるべき理想の姿に向かい、混じりけなしの気持ちで行動する若者が変革の力となった事例は各国にあります。しかし日本の学生運動は1960年代のピーク以後は一部の過激なグループという扱いを受け、メディアでもそう報じられてきました。

2015年に全く新しい学生運動が登場しました。SEALDsは理性的な言葉で語る普通の学生たちの運動であり、政権に近いメディアはこの運動の広がりによって危機感を抱きました。そして報道すれば広がるという考えから記事にせず無視したのです。2015年6-9月の4か月間、一面にSEALDsまたはシールズという文字が現れたのは東京新聞20回、朝日新聞12回、読売、毎日、産経は0回。(上智大学調査による)

学生運動や市民運動はメディアで報じられることによって広範に広がり、社会の変革につながっていくものです。日本の大手メディアは権力の一端として市民運動の広がりを抑える役割を担い続けています。脱原発についても、大手メディアの在り方がネックとなっています。ドイツ社会との違いは、そのあたりにあるように思います。